

市長あいさつ



平成27（2015）年は、戦後70年、また、芦屋市議会が昭和60（1985）年10月15日に「非核平和都市宣言」を決議してから、30周年に当たる年でもありました。

いま戦後70年を過ぎ、悲惨な戦争を体験した方々がますます少なくなる中で、戦争を知らない世代や若者に、戦争の悲惨さ、平和の尊さ、命の大切さをどう伝えていくかが課題となっています。

芦屋市では、一昨年から戦争を体験された方々の証言を記録する活動を進めてまいりました。

この度、これらの記録をはじめ、新たに寄稿いただいた被爆体験記、毎年夏に開催している「みんなで考えよう平和と人権」事業などに加え、過去に作成した平和資料を再編し、「平和記録集」を作成しました。

終戦間近の昭和20（1945）年5月から8月にかけて、芦屋市でも大規模な空襲があり、多くの尊い命が奪われました。このような悲惨な体験を二度と繰り返すことのないよう、また、この冊子の表紙になっている小学生のポスターに描かれているような平和で笑顔の絶えない明るい未来を実現するために、多くの方にこの冊子をお読みいただき、平和への思いを新たにさせていただく機会となれば幸いです。

最後になりましたが、発刊にあたり御協力いただきました皆さまに心よりお礼申し上げます。

平成29（2017）年3月

芦屋市長 山中 健

教 育 長 あ い さ つ



芦屋市教育委員会では、戦前の芦屋について記録するため、当時の芦屋のくらしやまちなみについて、市民の方々から聞き取り調査を行ってまいりました。その中には戦時中の体験も多く含まれており、本冊子に市民の方々からお聞きした体験を掲載させていただきました。それらをご覧いただければ、当時の子ども達にとって目の当たりにした戦争が、現代の平和な日本では想像もつかない、とても悲惨な、とても悲しいものであったことを知っていただけることと思います。

本市は、昭和20年に4度の空襲を受け、多くの市民が亡くなり、負傷しました。これらの空襲によって市街地の4割が焼失し、学校も校舎の8割を失いました。戦後70年を機に刊行しました本冊子をご覧いただき、戦争の恐ろしさや平和の大切さを改めて考え、戦争の記憶や記録を次世代へと継承していくことを願っています。

平成29（2017）年3月

芦屋市教育長 福 岡 憲 助

目次

I 戦争の記憶

- 「あの日から今もなお ～ヒロシマの原爆から～」 千葉 孝子さん・3
- 井田 肇さんの戦争体験・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
- 高瀬 湊さんの戦争体験・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

II 芦屋市の平和事業

- 戦後70年・非核平和都市宣言30周年記念事業・・・・・・・・ 21
- 平和事業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
- 平成28年度「小学生の描いた平和ポスター展」受賞作品・・・・ 36
- 平和首長会議加盟都市としての活動・・・・・・・・・・・・ 41

III 芦屋市の戦争の記録

- 1 市民とともに考える「芦屋の戦争」展（平成3年7月発行）・・・・ 47
- 2 市民と考える戦争展資料「芦屋への空襲記録」（平成4年7月発行）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 91
- 3 いまこそ語り継ぐ 私の戦争体験記～芦屋市民の記録～
（平成18年7月発行）・・・・・・・・・・・・ 123
- 4 広報あしや 戦争関連記事・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 143
- 5 芦屋市内の戦争遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 168
- 6 用語説明・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 172

I 戦争の記憶

「あの日から今もなお ～ヒロシマの原爆から～」 千葉 孝子さん

井田 肇さんの戦争体験

高瀬 湊さんの戦争体験

あの日から今もなお ～ヒロシマの原爆から～

千葉 孝子さん

私は昭和16年(1941年)8月30日に生まれました。その年の12月8日に太平洋戦争が始まりました。私には3人の兄がいて、4番目に生まれた私はお転婆でやんちゃな女の子でした。何でも兄の真似をしては思うようにならずにべそをかいていました。戦時中とはいえ、それなりに平穏な日々を過ごしていました。

あの日 昭和20年(1945年)8月6日

(幼い私には当時の記憶はほとんどなく、母と兄の詳細な記録をもとにしています。)

私たち一家は広島^の南千田町に住んでいました。何故か広島は空襲警報は鳴るのに爆弾が落ちることはなく、「広島には爆弾は落ちない」と市民は思い込んでいました。その日の前夜にも警報が鳴り、未明に解除されたので防空壕から出てきて朝食の準備をしました。我が家は父は応召しており、父の妹2人と母、兄3人と私の7人家族でした。朝食を終えて叔母2人はお弁当を持って出かけ、兄たちは登校前のひとときを庭で防火水槽に浮かべた木切れに石をぶつけて、撃沈、轟沈^{ごうちん}といって遊んでいました。

母は10か月の身重で前夜眠れなかったので蚊帳^{かや}の中で休んでおり、私も側にいました。突然「お母さま変ですよ！B29の音が聞こえる！」と兄たちがばたばたと駆け込んできました。その途端、ものすごい光が炸裂して黒い煙突のシルエットが浮かび上がり、家ががらがらと崩れてきて生き埋めになりました。母は裏庭に直撃弾が落ちたのだろうと思ったそうですが、とりあえず声をかけると全員無事で瓦礫から引っ張り出し、防空頭巾などの身支度をし、お産に必要なものや水を入れたやかんなどを乳母車に積み込んで逃げる支度をしました。私は恐怖のあまりか腰が抜けたみたいに立てなかったので母が負ぶってくれたそうです。

外に出てみるとあたり一帯の家はほとんど原型をとどめないほどに壊れ、我が家は修道中学校のすぐ北側の道路に面していたのですが、そこを人々が荷物を抱え、大八車を曳きどンドン逃げていくんです。乳母車が邪魔になって途中の溝に落とし込んで、とにかく隣組で指定されていた場所に向かいました。途中御幸橋^{みゆきばし}の近くは大勢の人々で混雑していて、下の2人の兄の姿を見失ってし

まいりました。母は避難場所に着くと長兄に私を預けて、2人の兄たちを探しに行きました。

地獄を見た母

常日頃「なにかあったら大手町の本田さん（父の知人でなにかにつけてお世話して下さっていた方）のところへ行くんですよ」と言い聞かせていたので、母も当然そちらに向かいました。爆心地に近いなどとは全く知りませんから。（注：我が家は爆心地から2.5km、本田さんの家は400m）近づくにつれてどんどん人が逃れてくる。髪の毛はちりちりの人、服は焼け焦げてボロボロの人、皮膚がベロンと剥げてワカメの様にぶらさがっている人、飛び出した目を両手に受けている人、すでに黒焦げの遺体も。火の手があがり「これ以上は危ない！ 帰れ！」という叫び声に、炎の向こうにちらちらする影が子どもたちではないかと思いつつも残してきた2人とお腹の子を思ってゴメンねと、もと来た道を帰り、兄と私の所へ戻ってきて、やれやれと川岸の土手に身をもたせかけたとき陣痛がくるんです。こんなところで！ 犬や猫じゃあるまいし！ 当時の婦人雑誌に時ならぬ時に陣痛がきたら収める方法というのが書いてあったのを思い出して、お腹に手を当てがって自己暗示をかけているうちに一瞬気を失い気がついたら陣痛は収まっていました。

しばらくして偵察のための飛行機が低空飛行で来たりするたびに、あわてて物陰に隠れたりしているうちに夕方になり、持ってきたヤカンがからっぽになり、近くに井戸があるとのことで、兄が水を汲みに行きました。ところがなかなか帰ってきません。心配になった母が私の手を引いて迎えに行くと、向こうから小さな3つの影が近づいて来ました。下の2人の兄と一緒にでした。聞いてみると、御幸橋のところで人混みに押されて橋を渡ってしまい、たまたま父の職場の人に出会い、「危ないからここにいなさい」といわれて夕方までいて、「もう大丈夫。お母さんが心配してるよ」ということでまた御幸橋を渡って帰ってきたのですが、橋の上には多くの遺体やけがをした人々が横たわっていたのをまたいで歩いたそうです。またぐと皮膚がずるっと剥けて転びそうになったが怖いとか可哀そうだとは思わず、むしろ邪魔だなあと思いながらのろのろ歩いたそうです。橋を渡ってしばらく行くと水の出ているところがあり、そこで兄と出会ったわけです。

その頃になると軍隊が救援に入ってきておにぎりを配ってくれました。いつもなら真っ先にかぶりつく兄が「食べたくない」とぼんやりしています。夜に

なって激しい嘔吐と下痢を繰り返しました。今から思えば原爆による急性症状だったのですが、当時は誰もそんなことは知りませんでした。

その夜はそのままそこで過ごし、対岸の夜空を焦がす炎の恐ろしさを覚えています。

2日目もまだ危ないということで隣組の人たちと修道中学の校庭で夜を明かしました。

3日目ようやく家に帰りました。屋根も壁も壊れ辛うじて玄関の3畳の間だけが使えそうでまさに2階が屋根代わりでした。2人の叔母も何とか帰ってきました。瓦礫をかき分け、防空壕から掘り出し、何とか生活できるようになったところで、母はお産のことで日赤病院に行きましたが、「こんな怪我人が一杯の所でお産どころですか！」と医師にけんもほろろに拒否されましたが、「お産は一人でもできる。へその緒はこのようにして」とアドバイスの上、貴重なコードチンキを小瓶に入れてくれました。

また、数日後に爆心地が何処かも分らぬまま、消息の知れない本田さんの家を訪ねた母が見たものは跡形もない瓦礫の中の流しの下たびのバケツでした。そこにはお骨が収められていて張り紙がありました。「本田千吉、家族を荼毘に付す。私は××にいる。」

あとで千吉さんにお会いすることが出来て分かったことですが、千吉さんはたまたまその日そのバケツを持って別の所に行っていたのですが、帰って見たら家族全員亡くなっていた。お父さんは庭で薪を割っておられて斧を振り上げたまま、お母さんはアイロンを握ったまま、お兄さんは水道の蛇口を握ったまま黒焦げになっていたそうです。

8月19日の未明に陣痛が来て、母は何とかへその緒を切るところまではやって意識を失いかけたのですが、叔母が近所の人を引っ張ってきて無事出産を終えました。この弟も今年72歳、元気に頑張っています。

でも私たちのように家族全員が無事でなおかつ一人増えたなどというのは、本当に奇跡的なことだったのです。

かろうじて生き残った人々の上に爆発によって大量に放射された放射能は死の灰・黒い雨になってそそぎ、地表の様々なものを放射性物質に変え、呼吸や飲食物を通じて体内に侵入しました。そして投下時には遠くにいたのに、救援や肉親捜しのために入市した人たちの中から一週間後、十日後、数か月後に直接被爆した人たちと同じような症状（下痢・嘔吐・発熱・脱毛・紫斑・出血・

壊死など) が現われ次々に死んでいったのです。

低線量被曝や内部被曝による影響はさらに長い時間の経過を経て、様々な疾病を発症させていくのです。

被爆者として生きること

普通の爆弾と違って原爆は放射能による被害をもたらします。まず免疫力が低下します。そして様々な影響が長い期間持続します。さらに放射能によって傷ついたDNAが体内でいつ牙を剥くか現在の科学でも解明されていません。

被爆した年の11月私たちは広島から京都に戻り、さらに3年後父の転勤に伴い芦屋に移り住みました。その頃から様々な後遺症(だと思われる)が出はじめ、かわるがわる熱を出したり下痢をしたりしていました。被爆のせいとは知りませんから母は「前はこんなことなかったのに」と悩んだそうです。

私が思春期を迎えたころ、「被爆者は子どもができにくい」とか「二世は白血病になりやすい」とか言われはじめ、「私は結婚してはいけない」「子どもを産んではいけない」と自分に言い聞かせていました。そんな私の前に1人の男性が現われ、お互いに結婚を意識したとき、恐る恐る被爆者であることを打ち明けました。助産婦だった彼の母親は猛反対しました。「長男のあんたに子ができんかったらどうする！生まれた子が白血病になったらどうする！」と。

しかし彼は「共に重荷を負おう」と言ってくれ結婚しました。案の定鼻血が出たり、貧血で倒れたり、何より全く身ごもりませんでした。あとから結婚した妹が赤ちゃんを連れて里帰りした時「外孫でもこんなに可愛いのに、内孫やったらもっと可愛いだろうね」とあやしている姑を見て何度物陰で泣いたことか。その姑が脳溢血で亡くなり、結婚10年目に初めて第一子が誕生、続けて第二子、さらに第三子に恵まれました。でも子どもたちが体調を崩すたびに被爆のせい？と自分を責めました。子どもたちが何とか成人して結婚し、生まれた孫が体調を崩すたび同じように苦しんでいます。

兄たち3人は3人とも被爆後50年以上たってからそれぞれ癌を患っています。特に2番目の兄は高熱を出したり、紫斑が出たり、胃潰瘍を繰り返したりしながらも被爆の実相を訴え続け、甲状腺機能低下症で原爆症認定された後、74歳で亡くなりました。

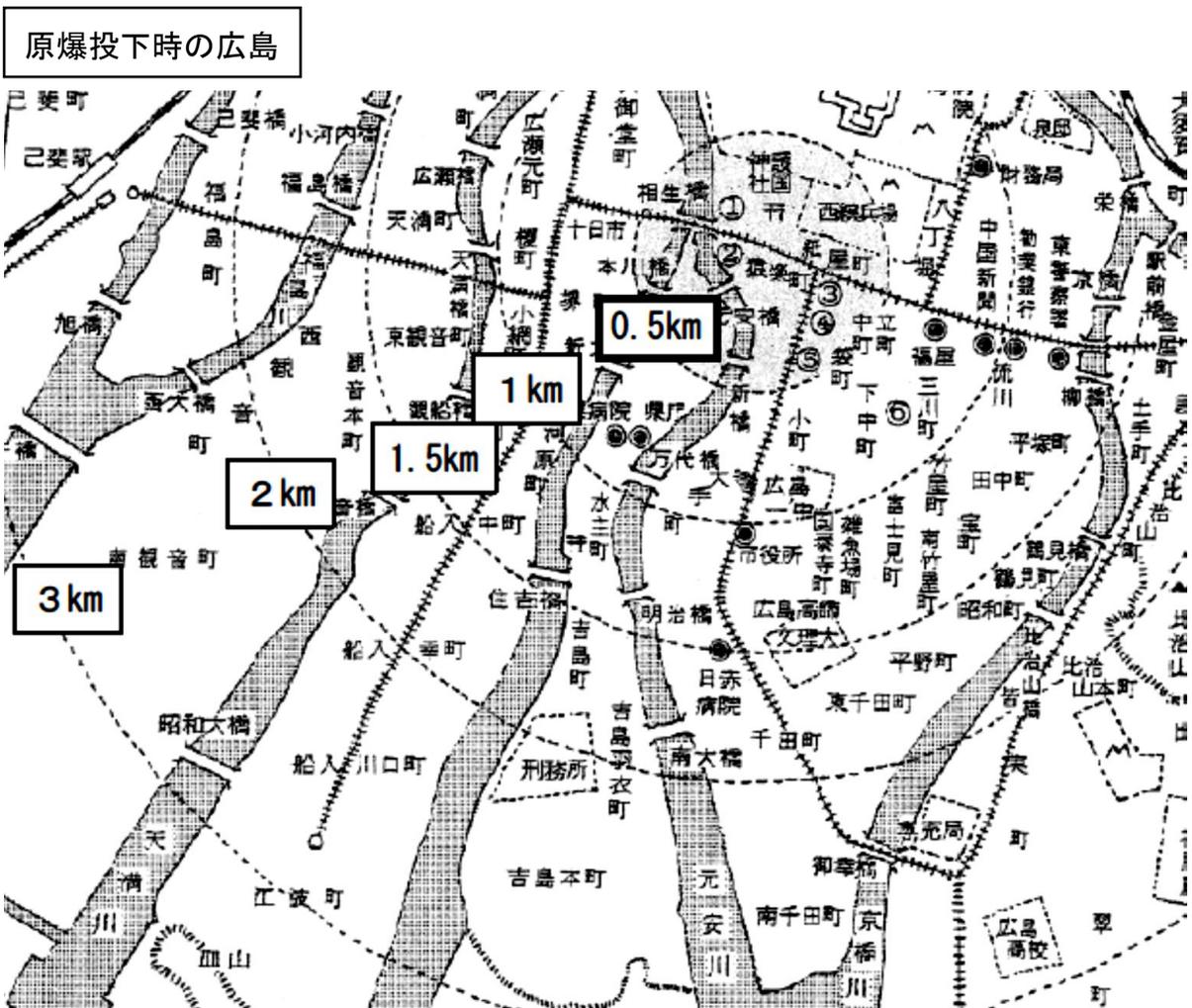
私自身も甲状腺に問題ありとか、骨粗しょう症、CEA高値(癌になりやすい)とか言われながらも、被爆者として被爆の実相を訴えるために頑張ってい

ます。

核兵器のない世界へ

一番恐ろしいのはヒバクの影響は世代を超えて現れ続けるということです。

そして今、まだ地球上ある15,000発の核兵器の破壊力は広島・長崎の2発の原爆の数万倍にもおよびます。核兵器は、人類はもとより地球上に存在するすべての生命を断ち切り、環境を破壊し、地球を死の星にする悪魔の兵器です。私たち被爆者は後世の人々が生き地獄を体験しないように、生きている間に何としても核兵器のない世界を実現したいと切望しています。



この証言は、本市教育委員会生涯学習課が、井田肇さんと高瀬湊さんから聞き取った戦争体験を文章にしたものです

井田 肇さんの戦争体験

—— 井田さんは、何年生まれですか？

井田 昭和10年生まれです。

—— 小学校に入学されたのは昭和何年ですか？

井田 昭和16年4月です。はじめて山手国民学校と改名になった年です。

この年の12月に太平洋戦争が開戦しました。私たちの年は、山手尋常小学校から山手国民学校へ改名された1期生です。ですから、純粋な国民学校の入学生であり、卒業生ということになります。

—— 山手国民学校の当時の写真をみると、校舎をつる草で覆っていますね。

井田 これは戦時中のカモフラージュです。カモフラージュのために緑色のペンキを塗りたいと思っていました。そんなことしたって意味がないんだけどね。

—— 今からしたら、こんなことをしても意味があるのかなって思います。山手小学校がこのような状態になったのは小学何年生の頃ですか？

井田 小学5年生の頃かな。その頃、いろんな標語を作れとか、いろんなことがありました。簡易保険の標語の募集があって、それに手を挙げたんです。「一億が簡易保険に突貫だ」。「突貫」とは、突撃のことです。突撃の時は、「突貫」と言っていました。それが入選して、鉛筆と色鉛筆をもらったんですよ。それが得意で。

—— 山手国民学校に昭和16年4月に入学されて、昭和22年3月に卒業されたということは、井田さんにとって小学生時代がちょうど戦争をまたいでいるということになりますね。

井田 そうです。その当時、私は体が比較的大きかったものですから、打出の味噌屋さんから給食の味噌汁に使う味噌をいただいて、その味噌樽を小学校に運んでくる役目があったんです。私の親父は、終戦の年、昭和20年1月10日に亡くなっています。いわゆる、戦病死しています。

—— 戦地で亡くなられたんですか？

井田 いえ、篠山の連隊に入っていました。小学4年の時かな、味噌樽を3人か4人でリヤカーでガーッと小学校へ運んで行ったら、「井田くん、すぐに自宅に帰りなさい」と黒板に書いてありました。親父は家に戻ってきていて2階でふせっているけれども、今日はえべっさんの日だから誰か連れて行ってくれるなあと思って帰ったら、親父が亡くなっていたんです。もう、あの時代は何にもありませんからね。即席の松の木の棺をつくって、それに遺体を入れて、縄で縛って三条の火葬場に行ったんですよ。それが火力が弱いから燃えないんです。親父の頭が焼けるのを見ていました。僕は小さかったけれども喪主だから、泣いたらいかんと思うんだけどね。遺体を焼くと頭が暴れるんです。それを見ていて、やっぱり戦争はつらいなあ子ども心に思いました。小学4年、5年の時の体験というのは一生、もうその話になるとつらいです。震災もつらかったけれども、戦争体験というのはつらい思いをしました。それでも、当時は鬼畜米英ですから。「突ちて死止まん」とか言うてね、ドッジボールでチャーチルやルーズベルトの顔を作って竹刀や木銃で突くのを、毎日やっていました。

—— お父様が徴兵されたのは、おいくつの時ですか？

井田 おそらく、昭和18年だと思います。38歳で亡くなっていますからね。最後は、体もよくないのに徴兵されていてって命を落としていますから。

—— 井田さんのお家は芦屋市内にあったんですか？

井田 そうです。三条南町です。その頃の三条町や三条南町あたりは、やっぱりすごい防火訓練をしていました。いろんな警戒警報が発令したら、防空壕に入らないかんとか。

—— 井田さんは昭和10年生まれということですが、昭和12年から日中戦争になっていますね。井田さんはやはり生まれたときから、日本は戦争しているという感じでしたか？

井田 そうです。うちのじいさんは日清・日露戦争に行っています。それから、私の伯父も陸軍で日中戦争に行っている。叔父もシンガポールや東南アジアの方に戦争に行っていますから。

—— 井田さんが小学1年生のときに太平洋戦争が開戦したはずですが、そのときのことして覚えておられるんですか？戦争が始まったということは、

小学1年生でもわかるものですか？

井田 わかっていました。私が小学1年生の時に、私の今住んでいる家の近くにコンクリート管を2本用いて防空壕を作ったんですよ。たぶん、伯父と、伯父と親しかった方々といっしょに作ったと思うんですけども。どこから手に入れたかわかりませんが、コンクリート管を穴を掘って埋めて防空壕を作ったんです。

—— 日本がまだ空襲を受けていない昭和16年に、もう防空壕を作っていたんですか？

井田 昭和16年、その頃に作ったと思います。防空壕の入口はカモフラージュしていて、北側と南側の入り口から階段で入れるようになっていました。階段を下って入ったら、何人か座るようにできていました。当時としては、ものすごく立派なものだったと思います。食用品店をしていましたから、ここに米とかアミノ酸とか醤油とか、そういう食料品を置いていました。

防空壕でゲートルを巻いて見ていたら、高射砲を撃ってもB29まで届かない。芦屋浜にはB29を撃ち落とすために高射砲台があったんですよ。今のテニスコートの南方の浜辺です。そのうち、低空で来たB29にバチーンと一発当たって、パイロットがパラシュートで降りてきた。そのあと、どうなったか分からないけど、捕まったと思います。沖で誰かが捕まえたって言っていた。われわれは、その時は「やった」と言って拍手していましたよ。あの時は、「鬼畜米英」と言って、それこそ必死になって「鬼みたいな大男や」ということになっていましたからね。

—— 防空壕は庭に作っていたんですか？

井田 いえ、家の下に作っていました。

—— この防空壕を利用するのは、井田さんの家と隣の叔父さんの家の2軒だけでしたか？

井田 いや、その隣の近藤さんの家も併せて3家族が中心で、その都度別の誰かが入ってきました。私は、いちいちゲートルを巻くのが嫌だし、小さいのに2階で寝ていましたから、空襲警報が鳴っても防空壕に入るのが嫌だと言っていました。めんどくさいし、もういいわって。眠いのに引っ張り起こされて。

—— その防空壕には何人ぐらい入れるんですか？

井田 おそらく、つめたら12～15人ぐらいは入れるけど、僕なんかは子どもだから、ちょこっと入ったりしてみて。大人は出て、消火活動をしたり、見回りをしたりしていましたからね。常時残っているのは子どもくらいだったと思います。あちこちで「焼夷弾が落ちたあ、爆弾が落ちたあ」って。それこそ、近くの栗原外科にドスーンと焼夷弾が落ちたんですよ。焼夷弾がばらけずに束になったままドスーンと屋根を突き破って2階の座敷に落ちたんです。私は行かなかったけど、みんなこれが燃えるか〜と思って、おそろおそろ集まったんですよ。そしたら、これは不発だから使えるということになって、束になった焼夷弾をばらしましませてね、みんな1本ずつもらったんです。それで、焼夷弾を風呂焚きに使いました。当時は薪をくべていたけれども、グリースが詰まった焼夷弾を使ったら、もう火力があるということで。

—— たくましいですね。不発の焼夷弾をそのように利用されていたんですね。

井田 そんなこと、本当はしたら駄目なんですけれども、薪がないんだから。燃やすものがないからしょうがない。

—— 三条南町でも空襲の被害があったんですか？

井田 そりゃ空襲の被害はありましたよ。特に東灘よりのところは随分焼きましたからね。

—— 以前、お聞きしたことがある芦屋市内であった機銃掃射の被害について改めてお聞きしたいのですが。

井田 機銃掃射があったのは、芦屋川沿いの開森橋から下ったところです。このあたりに陸軍幼年学校の生徒さんたちかな、若い15、16歳ぐらいですね、演習に来ていたんですよ。そこでやられたんです。8月の大阪空襲か神戸空襲の日か。米軍の戦闘機にバリバリバリとやられたんです。その時、生徒たちは伏せたから、みんな、こう腹からバーってやって。私の家のすぐ前に栗原外科という医院があって、ここにみんな運ばれてきました。15～20人ぐらいやられたんですよ。私の前の家の庭にも負傷した生徒が並べられてました。もちろん、医院の前庭にも負傷者が並べられていて、先生が一人で診て、腹から腸が出たりしてましたから、とっさの判断で「あっ、これはダメ」って、絆創膏でバツバツとバツ印の絆創膏を貼られたらね、もうこれは生きる見込みがない。まだ、見込みがある人たちは西宮の病院に運ばれました。おそらく半分ぐらいが送られたけども、

ダメな人は、その時は最後の言葉は「お母さん」と叫んでいました。「天皇陛下万歳」とは言いませんよ。「お母さん」と言って息絶えたんですよ。そりゃ、みんな丸坊主で、若い15、16歳です。

—— 機銃掃射にあった青年たちは、どこから来ていたかわかりますか？

井田 芦屋の方ではなかった。どこからか訓練で来ていたんですね。

ところで、米軍の爆撃機は神戸の空襲で余った爆弾を芦屋や西宮に落としていきました。その時に僕の友だちがやられたんですよ。その時、先生が「井田君、同じ帰り道だから一緒に立ち会ってくれ」って言われたんです。

—— 爆弾が投下されたということは、昭和20年5月11日の空襲ではないでしょうか？

井田 5月11日の空襲です。友だちは防空壕の中でズドンと一発でやられて、この日のあと、何日あとだったか覚えていませんけれども「井田君、確認のためにちょっと来てくれ」って言われました。内心怖かったんですけども、14、15体の遺体が遊び場の安楽寺に並べてありました。俵を切ったムシロを被せてある。顔をみると、最初はみんな全然違う人でした。最後から3番目くらいかな、バツバツと見たら、井上稔君でした。友だちは、井上君っていう名前でした。爆風の中でやられていますから、体はきれいなんですよ。顔を見た時、「ああ」ってなって、「井上君です」と言ったら「ああ、そうか。」って。そのこともやっぱり鮮明に覚えています。戦争って、ついその何日か前に爆弾を落とされて爆風で死んだいうのも、陸軍幼年学校の生徒たちの機銃掃射と、その2つは、私とかたや同級生、かたや若い人たちだったから鮮明に覚えています。だからね、昭和19年、20年っていうのはね、いろんな映像、いろんなのを見ているから、そりゃいまだに夢で見ることがありますね。

—— そうですか。私たちは戦争は学校の授業では習いましたけれども、体験していませんので、想像もつかないです。

(平成26年6月聞き取り)

高瀬 湊さんの戦争体験

—— 高瀬さんは、芦屋生まれですか？

高瀬 はい、芦屋で生まれました。

—— 何年生まれですか？

高瀬 昭和3年です。

—— ずっと呉川町にお住まいですか？

高瀬 はい。これは、私が昭和20年に書いていた日記なんです。この日記の表紙が何でこんなふうに焼けているかというと、昭和20年8月6日の芦屋の空襲の時に焼けたんですよ。

—— 焼けてるんですか？

高瀬 ええ。焼けているんですよ。この日記の上に本が2、3冊あって、この程度の火傷で済みました。この日記をもとに『ある中学生の戦中日記』（東方出版）という本を出しました。

—— この日記をもとに書かれたんですか？

高瀬 そう、完全に日記の文章です。

—— すごいですね。

高瀬 昭和20年当時、私は、家は変わっていますが同じ呉川町に住んでいて、その家から工場に通っていました。工場というよりは、もう学校のよいうにずっと工場に通ってました。昭和20年5月11日の芦屋最初の空襲はすごかったですよ。私も年齢が若くて、中学4年生って怖いもの知らずでしたから、随分いろんなことをしたんですけども。



—— 中学4年生っていったら何歳になるんですか？

高瀬 16歳です。あの頃、中学5年生でしたから、4年生で卒業になりまして卒業してからの年です。我々は本当に太平洋戦争に始まって、太平洋戦争に終わったと言うんです。特に昭和20年5月11日のは僕が受けた初めての空襲だったので、そういう意味では印象が強うございます。この5月11日の爆撃の後、私はすぐ見に行ったんですよ。すると、やっぱり大きな穴が開いていて、そこに憲兵が全部取り巻いて見張ってました。「憲兵さん、これ何トン爆弾ですか？何キロ爆弾ですか？」と聞いたら、

1 トン爆弾と言いました。

—— 芦屋が2回目、3回目の空襲を受けた6月5日、6月15日は昼だったんですか？

高瀬 6月5日は白昼です。5月11日も白昼でした。あと6月15日も白昼。それから8月5日～6日は夜間。当時の新聞に載った敵機の日本空襲、来襲状況を記録していましたが、これだけたくさんの敵機が我が庭を歩くがごとく、ボンボンボンボン、毎日、毎日、毎日、休憩なしで、もういつも空襲警報が鳴りっぱなしでね。これはもう全国ですから、芦屋だけではございません。

—— この日記は、空襲の時にはどのように避難させたんですか？

高瀬 風呂敷に包んで、上に本を積んでいました。

—— それはお家の中ですか？

高瀬 いやいや、8月5日～6日の空襲の時に僕はこれが燃えたらいかんと思って、玄関の柱の横の空き地に置いとったんですよ。すると焼夷弾がその真横にボンと落ちたんです。で僕がね、あの頃はやっぱり怖いもの知らずで防空壕から一番先に飛び出して、それをバケツと水を浸した夏布団でバァーっと上手いこと火を消したんです。あの時は消防団なんかももちろん来てくれませんでしたしね。みな自分で守らなアカンということで、近所のおっさん連中はいましたが皆、上から焼夷弾がボンボンボンボン落ちてくるでしょ。ビビッてしまって防空壕の奥にすっ込んでいて、全然よう出てきませんでした。僕はちょうど中学校で16、17歳、生意気な盛りで命知らずですから、「よっしゃ来い！」と言うて、僕が声を出して「頑張れ」言うて、一番最初に飛び出して。呉川町に焼夷弾や爆弾が7、8発落ちたんですかな、そして僕の家の中に2発と玄関横に2発落ちたんです。そして隣の家に3発落ちました。たまたま運が良かったのは、その並びに関して直撃弾がなかったんです。風向きがちょっとでも変わっていたら、もうバーンとやられて完全に燃えてるところですけれど、たまたま運が良かったんやろうなあ。それで運良く、風呂敷包みに入れて、その真横に焼夷弾が落ちてバーンと燃えたやつを僕が叩き蹴りましてね、日記はかろうじて燃え残ったわけです。

—— お家も無事だったんですか？

高瀬 お陰さんで無事で。隣の家も2発落ちたんですけれど、幸いにして家

屋に直撃がなく、2発とも板塀に落ちてバァーッと燃え上がるのを、こらあバケツでこんなことしたらあかんわ思って、さっき言いましたように夏布団を水に漬けて、それで叩きまくったんですわ。それでやっと消しました。

—— 空襲警報が鳴ると、防空壕に逃げるんですよね？

高瀬 ちゃちな防空壕ですよ。

—— 防空壕は各家庭にあったんですか？

高瀬 呉川町の場合は、あの頃は、隣保、隣組という7、8軒並んでいる家がありましたから、7、8軒で共同防空壕を作りました。みんな暇があれば防空壕作りに駆り出されて、大人や僕らも全員。土を掘って、その中に下水道の土管、丸い管を横にずうっと5つぐらい埋めて、あとは上に砂をかけて作りました。割と頑丈なものでした。まあ爆弾の直撃やったら駄目ですけど、焼夷弾ぐらいやったら上に落ちて、土がかぶさっているし、コンクリート管ですから、その中に女、子ども、老人がみんな奥の方に入って、活動できるような人だけが入口におって火を消すという役ですわ。僕ら怖いもの知らずだから、ほとんど防空壕に入ったことないです。いつも防空壕の近くにおってね、空見上げて「あそこに落ちる、こっちに落ちる」と言っていて、えらいやったもんですわ。まあ怖い目にあいましたなあ。

そういう経験をしてきたから、大したことではビクビクしませんなあ、僕ら。情けなかったのは、食べ物がなかったことですわ。ほんとに情けなかったです。ようあんなんで日本も本当にあんな馬鹿な戦争をね、それで勝つと思っていたんだからね、神風が吹いて勝つちゅうことやな、あほみたいなことをほんとに、あの時は。

—— その時、青年といってもどうしようもないですよ、大人が勝手に戦争を始めて。

高瀬 しかし、あの頃は16、17歳ぐらいは一人前の大人扱いしてましたよ。例えば、空襲警報が鳴るでしょ。そして飛行機が来た場合には火の見櫓に「やっ」ってよじ登ってね。ところが、実際、空襲になって飛行機が来たいうたら、みんな、やっぱり消防団のおっさんといったら普通のおっさんですよ、ビビってしまって何もようせえへん。

—— そりゃそうですよね。

高瀬 僕らはあの頃怖いものなしで、また高い所に登るのが好きですから、今やったら足が震えるぐらい高い所でしたが、バァーッて、もう消防団のおっさんら、いわゆる防空のおっさんらを押しのけてね、火の見櫓に登っていました。で、そのおっさんらは、「お前ら子供やから下りろ」とは絶対によう言わへん。というのは、こちらの方が身軽でね、ようやってくれるから喜んでいる。やっぱり妻子のことを考えたり、何やかんや上に登ったら危ないわけですよ。そやから、なるべく登りとうないわけですよ。そこに、この若者の怖いもの知らずで、おっさんの後をはって、上から「安心して待ってろ！」ってどなってね。

—— そうだったんですね。

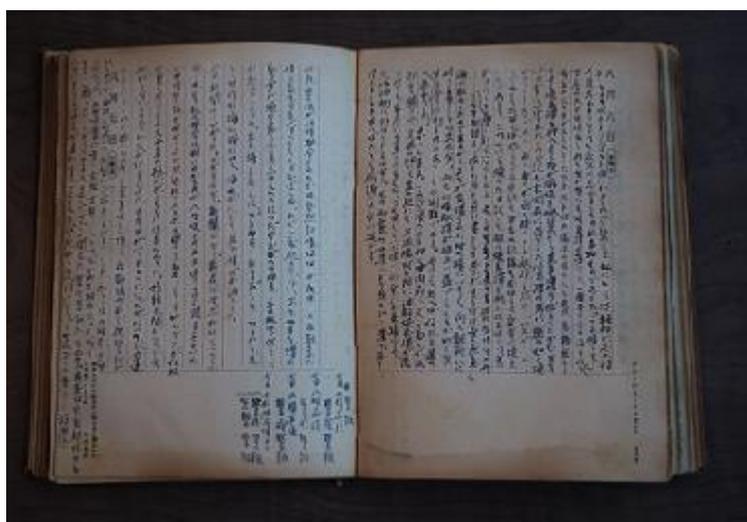
高瀬 それから学校の時の、特に中学、戦争中の写真はほとんどないです。卒業の記念写真もないですわ。たまたま卒業の時に集合写真を撮ったんですよ。撮ったんですけれども、その写真屋さんが昭和20年6月5日の空襲で燃えてしまって、ネガともどもに炎上しましてね、幻の卒業写真集。だから中学生のころの写真はないですよ。どういう時代で、どんな格好をしていたのかということも写真でもあればわかるんですけどね。しかし、当時は見るに見られんような格好をしていたと思います。もう着たきりスズメでね。外へ出るのも、どこへ行くのも、工場の作業員も、スーツと綿の半々のね、ペラペラしたもん着てね。ようあんな生活できとったと思いますわ。もう食いもんいうたら、米が2合3弱か。今でこそ2合いうたら、そんなにたくさん食べる人はちょっとおらんとおもいますが、あの頃はおかずが無いですからね、それでお菓子が全然ないでしょ。あれは、もうゾーッとするわ。戦争が終わった時には、僕らでもやっぱりホッ、何や知らんけどホッとしました。しかし外に出たら、外見はまだやっぱり、あくまでも一億総特攻でね。「総特攻隊になって全員死ぬんだ！」という気持ちをもっていましたからね。8月15日の終戦の天皇陛下の放送もね、集まれと言うたんが前日に出たわけですよ。

—— 前日に出たんですか？

高瀬 前の日に出ました。前の日にね、「集まれ、明くる日の正午から天皇陛下が重大な放送をされますから、皆各自集まってくれ！」と。ちょうどその日に限って朝から、ブンブン飛んでいたアメリカの飛行機が全然来ずですわ。まあ遠慮しとったんでしょ。で、放送を聞いたら、当時のラジ

オは安もんですから、天皇陛下のお声を聞いても、もうガーガーガーして聞こえにくい。僕はその当時は灘中から関学に行ってまして、関学の校庭で聞いたんですよ。何を言っているのか分かりませんわ。兵隊になった人にね、グチャグチャ言うてまして、「どうも戦争でこれ負けて終わったみたいやで」って言われました。帰りの阪神電車の中で軍人が軍刀を抜いて、暴れ回ってました。混んだ皆の前で、「終戦、敗戦、もう戦争が終わったのはデマだ！」と、「これから戦争をやり直せや！」と言うてね。完全におかしくなっていましたよ、あの頃は日本人。まあ想像つかんような世の中やったですわなあ。太平洋戦争只中の中学生生活ということやらね。日記には、軍事教練から空襲やら、勤労奉仕、それから学徒勤労働員のことを書いてますわ。それから最後の方に、終戦の前後のことを書いていますが、敗戦直後の中に、いろんなことが出ています。ほら無茶苦茶やったですよ。三ノ宮の電車の中で、特別攻撃隊帰りの人間がピストルの打ち合いしよるぐらいのことがありましたからね。みんなのいる電車の中ですよ、怖かったですわ。西宮球場でやっとプロ野球が再開して試合が終わったと思ったら、暴漢が4、5人、観客席から下りてきて、審判を叩く殴るの無法地帯や、ほんと無法地帯ですよ。もうそういうの当たり前でしたわあ、もう。怖くて、怖くてまともに歩けませんでしたわ。まあえらい世の中やったもんですわ。

(平成27年5月聞き取り)





花水木通り（呉川町）